

野田宇太郎

日本耽美派文學の誕生

河出書房新社

日本耽美派文學の誕生

昭和五十年十一月二十日 初版印刷

昭和五十年十一月二十八日 初版發行

著 者 野田字太郎

發行者 中島隆之

發行所 河出書房新社

東京都千代田區神田小川町三の六

電話(03)二九二一三七一一

振替 東京一〇八〇二

印刷 中央精版・製本 大口製本

定價は函・帯に表示しております

目次

第一部 パンの會

パンの會序説 9

五足の靴（九州旅行と南蠻文學）

「明星」消ゆる日 86

Pan の 笛 95

ヴィナスとバツカス 112

黒杵事件 150

遊樂の權利 181

第二部 パンの會の周邊

「屋上庭園」 195

パンの會の詩歌集 207

「食後の唄」 208

『東京景物詩及其他』	221
『酒ほがひ』	232
その他の詩歌集	236
フリッツ・ルンプ	243
觀潮樓歌會とパンの會	258
龍土會とパンの會	264
パリのカフェ文學運動とパンの會	272
幸徳事件とパンの會	285
「スバル」群像（雑誌「スバル」成立の研究）	296
青春の季節	296
石川啄木の上京	303
プレイアデス	314
パンと鷗外	331
形成と前進	337
友情と論争	352
掠鳥通信	369
デカダンの回復	382

隔りゆく一人 389

「未來派宣言」と彼等 397

季節の終り 407

鷗外の『青年』とその時代 416

第三部 文學と美術

錦繪と近代詩 431

「方寸」の人々 442

序説 442

「方寸」の創刊 446

「方寸」の漫畫 452

同人 456

詩と繪 459

「方寸」の版畫 466

特輯號 471

「方寸畫曆」と附録その他 475

結語 478

「方寸」同人畫家詩集

詩作品目錄

493

479

全卷目錄

497

瓦斯燈文藝考

517

ともしびの文學

517

瓦斯燈出現

526

おどろきと讚美と

536

錦繪について

546

銀線のうた

554

瓦斯燈時代への回顧

577

資料 五足の靴（全文及びスケッチ）

581

おぼえがき

627

圖版目錄

630

綜合索引

日本耽美派文學の誕生

第一部
パンの會

パンの會序説

「パンの會は一面放肆なところもあつたが、畢竟するに一の文藝運動で、因循な封建時代の遺風に反對する歐化主義運動であつた。例の印象派の理論、バルナシヤン又サンボリストの詩、一體に歐羅巴のその頃の文藝評論などが之に氣勢を添へ、明星又スバル、方寸、屋上庭園、或は自由劇場といふやうなものの起つた時代に適應するものであつた。それ故に小網町とか西河岸とかいふ地域も廣重や清親とは別の意味で愛好せられ、パンの會がさう云ふ處に會場を搜すといふのも自然の傾向であつた。當時は皆概して藝術至上主義で、好藝術を作らうといふ欲望に燃えて居り、その爲めの寵としてパンの會などが作られたのである。」と木下杢太郎は當時のことを明解に述べてゐる。^{註1}パンの會は明治四十一年（一九〇八）末から同四十五年（一九二二）に互つて東京の主として下町に展開された耽美主義的文藝運動であつたし、それ故にわが文藝史上に「近代」の名を耀やかした唯一の文學運動であつたといふことが出来る。

木下杢太郎はこのパンの會を企劃したばかりでなく、詩人仲間の北原白秋などと共に、石井柏亭、山本鼎、森田恆友などの美術雑誌「方寸」に據る若き美術家達と共に、その中心となつて絶えず文藝運動の主導者でもあつた。初夏の宵に打揚げられた花火のやうに、パンの會の爆發は文藝史上に絢爛たる青春の華を打ち展いた。それは現代に於てもなほ身近な時代であるために、その實相を究めようとする人はあなかつた。しかし、常に時は過

ぎつつある。我々は、我々自身の來歴を知り、それによつてこれからの行くべき道を求めねばならぬ地點に立つてゐる。わたくしが日本耽美派文學の誕生史としてのパンの會の研究を思ひ立つた理由もそこにあつた。

パンの會は一面、空太郎が述べてゐるやうに放肆なところもあつた。それはやがて頽唐といはれ、デカダンの傾向をも帶びて行つた。何故に放肆になりデカダンの傾向を帶びたのであらうか。それに就て少し考究しなければ、パンの會が文藝運動であるといふ斷定も輕率には出來ないのである。

パンの會が最も隆盛を極めた明治四十二—四四年は如何なる時代であつたらうか。それを知ることが先づ必要であるが、ここでわたくしが下手な解説を急ぐよりも、當時にあつて當時の人が語つた「その時代」の話を先づ傾聽する事が、より重要だと思ふ。上田敏が『現代の藝術』と題して明治四十三年末から翌年にかけて京都大學で講演した中に次のやうな言葉がある。

現代は産みの苦しみをしてゐる時ですから、いはば混亂の時代であります。表面から言ふとどうしていいかわからない。しかしそこを一つ乗切らうではありませんか。現代の特色は昔の人のこしらへた軌範・法則を批判し、削除して行く時代であります。ドイツの哲學者の言葉を借りて言へば、古き表を作りなほす時代であります。古き表はわれわれにとつて無益です。無益は有害であります。そこでわれわれは技術に於いて、道德に於いて、從來の習慣に於いて、哲學上の議論に於いて、皆古き表を書き變へるために努力してをります。これは單純な破壊とは違ひます……。

この上田敏が呼びかけてゐる學生達、その學生達と同時代同年輩の知的青年達が東京でパンの會を興したことを知れば、その時代背景が如何なるものであつたかもまた、おのづから察知することが出來よう。そのやうな時代に興つたパンの會は、またどのやうな経路で發展したのだらうか。

パンの會の人々は當時二十四五歳を中心とした青年たちであつた。明治四十二年當時の年齢は、後に加はつた人たちも入れて、吉井勇、谷崎潤一郎が二十四歳、柰太郎、白秋、長田秀雄、平野萬里が二十五歳、高村光太郎が二十七歳であつた。この他に石井柏亭を中心とする美術家の人々もあり、柏亭は二十八歳であつたが、その他は大體同年輩の青年たちである。

彼等が放肆といはれる理由はその青春性にあつた。つまり彼等は青春の權利として享樂を主張した。その青春のみが完全に抱き得る人間性の權利こそ、パンの會を文藝運動として成功せしめた力であつたといふことが出来る。

デカダンの傾向を帶びたのは、その時代の社會に對する反抗精神の存在を示すものであつた。デカダンとはいはば反逆精神である。當時にあつては、柰太郎が書いてゐるやうに、因循な封建思想に對する自由思想の反逆であり、上田敏の述べるやうに「古き表を作りなほす」ための封建固陋の文學に對する歐羅巴文學精神の移入による世界文學への突進であつた。世界性に向つて眼を開かうとした當時にあつては、異國情調 *an exotic mood* または異國憧憬のロマンティック思想が當然それに伴うた。それがまた文學運動に缺かせないエネルギーの本質でもあつた。

パンの會は一面エキゾティシズムの運動でもあつた。エキゾティシズムはそれが停滯し淀む時腐敗し消滅する。腐敗したエキゾティシズムは頹唐化する。パンの會のエキゾティシズムは不斷の流動をみせて絶えず新鮮であつた。そのエキゾティシズムを江戸情調を含む當時の都會情調の文學乃至美術として性格づけたのは、パンの會といふ新藝術の寵であつた。

異國情調といふ言葉は明治四十年頃までは文學用語としては全く使用されてゐない。情緒といふ言葉は明治三

十七年（一九〇四）發行の『藤村詩集』の序などにもみえてゐるが、情調といふ言葉は曖昧なままの情緒の疑似音または同義語として以外には使用されなかつた。情調といふ言葉を近代文學の上に生かしたのは他ならぬ木下太郎である。

今試みに明治の漢和大辭典の類をみると情調といふ熟語はない。パンの會が終つた大正以後の辭典にはぼつぱつ情調といふ熟語が見えるが、それも情緒と同義語に過ぎない。そして情緒といふ熟語には明らかに英語 emotion の譯語となつてゐる。情調は無視されてゐることがわかる。しかし同じ英語には emotion のほかに mood といふ言葉がある。その mood に相當する譯語は、それまでの日本文學には必要を感じなかつたことがわかる。ムードに相當する言葉として緒の字の代りに調の字をはめて「情調」としたのが明治末年のパンの會から熟しはじめた異國情調であつた。それまでのエキゾティズムは異國情緒と記されてゐる。この「情調」といふ新語を藝術上の熟語としたのは前にも述べたやうに木下太郎だつたが、木下太郎はドイツ語の Stimmung (mood) を情調の字に當て、都會情調、異國情調を、情緒とはつきり區別することで象徵主義藝術に不可欠な要素とした。

このやうに、情緒を情調と厳しく區分する程、パンの會はエキゾティズムに對する理解と能動性を持つてゐた。決して類唐趣味と言ひ捨てられるものではなかつた。強ひていへば西洋文學、ことに世紀末のデカダン文學が移入された時代にあつてはデカダンであつたともいへようが、それは當時のヨーロッパの社會狀態と日本の社會狀態との差異を認識すれば自ら明かとならう。

パンの會のエキゾティックな現象として、江戸情調と呼ばれ浮世繪趣味といはれるやうな一面にも觸れねばならない。パンの會が日本橋界隈や隅田河畔などに絶えず催され、情調を求めたといふことも、先に木下太郎の一文にもあつたやうに、徳川期の安藤廣重や明治期の小林清親などの錦繪時代とは違つた意味に於て愛好されたので

あつた。日進月歩の東京にあつて廢れゆく江戸の名残りを惜しむ感傷は、彼等多感な青年の心理に絶えずうごめいてゐた影ではあつたらう。しかし、知的で進歩的な彼等はその反面の新らしくヨーロッパ化してゆく未來の東京を育てる青年であつた。従つて彼等の江戸情調は、日本人ではなく、むしろ異國人が珍奇な眼で眺める異國としての古い東京であつた。西洋人の碧眼を透して再び日本へ還つて來た江戸であつた。つまり江戸情調も彼等にとつては懷古趣味ではなくて異國情調にすぎなかつたのである。

パンの會はエキゾティシズムの運動でもあつたが、エキゾティシズムのための消極運動ではなかつた。彼等の目標は世界性の藝術への行進であり、よりよき美術、よりよき文學の建設にあつた。従つて彼等はひとしく藝術至上主義者たちであつた。パンの會はまた、この意味から藝術至上主義運動ともいふことが出来る。わたくしがそれを耽美派ともいふ理由もそこにある。

彼等の青春の力が耽溺的傾向を帯びて行つたのも前述の上田敏の『現代の藝術』にあるやうな時代として當然といはねばならない。その青年達のエネルギーはまたバックカスとヴィナスの饗宴といふ方向に走つて行つた。

「然しその仲間には酒好の人が餘りに多く、その文藝運動としての意味が段々稀薄になつた。若しその間に石井君のやうな人が居なかつたらパンの會は早く墮落してしまつたに相違ない」と李太郎はこの間の事情を「石井柏亭君」といふ文章の中で述べてゐる。柏亭は常に冷靜で、李太郎や白秋のパンの會の運動は柏亭の主宰する美術雑誌「方寸」の集ひからはじまつたのだが、彼は決して耽溺者ではなかつた。李太郎もパンの會の運動を計劃し、藝術運動に缺かせない情調(stimmung)の演出につとめたが、決して耽溺はしなかつた。その他、畫家の織田一麿なども耽溺しないで、その耽溺振りを傍觀する一人であつた。しかし、『酒はがひ』の歌人吉井勇をはじめ、畫家の倉田白羊や木版家の伊上凡骨を巨頭とする幾多の酒豪連を仲間を持つパンの會は、日と共にヴィナス

からバツカスの領分へと移つて行つた。その果ては、もはや藝術運動としては意味をなさないほどの酒宴の會となり、遂には時代の推移と共に自然解消したのである。その解消はまた、この文學運動の完遂を告げることでもあつて、世は明治から大正に移り、そこに詩人歌人としての白秋、科學者詩人作家批評家としての柗太郎、詩人演劇作家としての長田秀雄、歌人作家としての吉井勇、詩人彫刻家としての高村光太郎、その他歌人としての平野萬里、作家としての谷崎潤一郎、郡虎彦（萱野二十一）、長田幹彦、等々次の世代を代表する文人達が輩出したのであつた。

また、パンの會若しくはパンの會の周圍に興つたものとしては劇壇に於ける小山内薫等の「自由劇場」の出發を忘れてはならないし、美術界に於ては雑誌「方寸」、詩に於ては「屋上庭園」、一般文學雜誌としては「スバル」、「三田文學」、「新思潮」（第二次）、「白樺」、それについて詩誌「朱鸞」などの出發を忘れてはなるまい。一方、これらの新しい藝術主義的運動に對立してゐた雑誌としては、「早稻田文學」などが判然とした主義のもとに所謂早稻田派の城を護つてゐるにすぎなかつた。早稻田派を日本の自然主義派とすれば、これら若々しい精神はまさしく日本の藝術主義派の勃興とも見る事が出来る。

*

パンの會が起つたのは從來の通説では明治四十二年といふことになつてゐるが、嚴密には明治四十一年十二月十二日の晩からであつた。

パンの會時代を彩つたエキゾティズムが胚胎したのは、遠く文明開化の明治初年に歸さねばならないが、それがパンの會的な性格に近づきはじめたのは明治四十年夏の、太田正雄（木下柗太郎）、北原隆吉（白秋）、吉井勇、平野萬里が與謝野寛に引率されて行はれた「明星」新詩社の九州旅行からであつたらう。天草や長崎等に残るキ